

座談会～民生委員活動を振り返る～ (令和4年7月22日開催)

テーマ：①民生委員と地域／②民生委員と子ども／③コロナ禍での民生委員活動／④これからの民生委員に期待すること



～自己紹介～

中村「甲州市民児協の会長と塩山地区の会長を務めている中村です。塩山地区は30名の大所帯であり、定例会等でなかなか発言が出てこないあたりが会長として苦慮した点でしたが、今ではコロナ禍ということもあり、グループ分けをしてその中で話し合いをすると、ベテランも新人も忌憚なく意見を出し合えるので、それらを吸い上げる形で定例会を進めています。民生委員になったきっかけは、近くに檀家のお寺があり8月16日に集まりがあった帰り道に区長と帰りながら「民生委員を選んでいるけどなり手がなくて困っている」という話を伺い、私は20歳の時には父親が60歳を過ぎていたので、なんとなく高齢者と付き合うことはいいことかなという風に思っていたので、私の方から「私で良ければ引き受けます」という話をしました。大変な部分もあるが、自分も勉強しながらやれるので、今は役を引き受けて良かったという印象を持っています。」



☆座談会メンバー☆

中村 文雄【3期】

担当地区(下塩後区)

甲州市民児協会会長

塩山地区民児協会会長

園部「園部という苗字は珍しいと思いますが、山梨県人ではありません。今現在は勝沼町菱山に住んでいて、民生委員は9年目になります。勝沼は全体で勝沼・祝・東雲・菱山の4地区あり、その4地区の代表という形で会長をしています。勝沼は主任児童委員も含め36名と人数も一番多い地区であり、なかなかまとまらないということもあるが、定例会では市の職員がタジタジになるような質問も飛び交っています。私自身は元々公務員で全国を飛び回っていたが、定年後勝沼地区に家を建てて住んでいたところに、「ぜひ民生委員をやってほしい。」と言われたが、地域には全く馴染んでなかったのが、公務員だったので事務的なことはわかるが住民的なこと、誰がどこに住んでいて誰が高齢者なのかは全くわからなかった。更に地域には同じ苗字が多いので、みんな下の名前で呼び合うため余計にわからない状態だった。住民が総会を開いて「この人をお願いしたい」という総意のもとで選ばれたので、やらないわけにいかず「みなさんが協力してくれるならやりましょう」ということで民生委員活動が始まった。やってみて地域のどこに



☆座談会メンバー☆

園部 健平【3期】

担当地区(菱山8区)

甲州市民児協副会長

勝沼地区民児協会会長

誰が住んでいるなど地域住民のことがよくわかったし、今では私が民生委員ということを知らない人は誰もいないという状況にもなったので、自分のためにもなって良かった。」

古屋「大和地区会長の古屋です。2期目6年になろうとしているが、うちの地区は代々2期で交代している。前回私が受けた時は、区の会計をしていた関係で、区長から区の役員3名に召集がかかり「民生委員が決まらずに困っている」という相談を受けた。何人も当たったが受け手が見つからず、当時の区長は私より年下の区長で非常に困っている様子だったので「会計と兼任で良ければ私が引き受けます」ということで民生委員になった。私は大和に生まれて73年間大和で生きているが、子どもから高齢者までみんな知り合いという中で、高齢者のところに行くと「古屋さん」とは呼ばれず「秀幸ちゃん」と呼ばれる。そんな関係だから高齢者宅を訪問すると、昔のことをよく覚えているので話が長くなったりするが、でも、楽しみながらやらせてもらっています。冒頭で事務局からコロナ禍のため会議もなかなか進まないという話があったが、私は「困った時は前に出る」が信条であり、昨日も地区定例会+支部社協との合同研修会も、事務局や市の防災主任とも相談し開催をしました。私としてはコロナ感染対策を万全にした上で前向きに進んでいきたいと思っている。」



☆座談会メンバー☆
古屋 秀幸【2期】
担当地区(大和丸林区)
大和地区民児協会長

今澤「児童福祉部会部長の今澤です。2期6年目を迎えるが、主任児童委員にはもっとベテランの方もいるので、座談会に私が出ていいのかな？という思いもあります。主任児童委員になったきっかけは、たまたま早期退職をしてたまたま54歳でたまたま改選期だったところに、自宅に区長さんが見えられ、断る理由が何もなかったためにここに至ります。」



☆座談会メンバー☆
今澤 恵子【2期】
担当地区(大藤地域)
児童福祉部会部長
(主任児童委員)

宇田「宇田です。塩山松里地区の下柚木という三富に近い北の玄関口といわれている過疎化の進んでいる地域であり、なったきっかけは人がいないからです。段々役が上から降りてきて、私の年代が今は「重役(重なり役)」となってきており、私も今防災リーダーを4期やりながら民生委員をやっていて、兼務して良いのかとも思ったが、とにかく人がいない。市が決めた地域の役に

人を当てはめた時に介護される側の人も入れないといけないという状況もあり、そういうことを下から吸い上げて上にあげていかないと、その土地にあったシステムはできないということをつくづく感じています。私はいま栖雲寺の住職をしていることもあり、50戸ほどの小さな部落の全住民を知っているが、いざそれを活用しようとする手立てがわからない状況でもあります。地域にはそういう人材が眠っていると思うので、そういった人たちを上手く活用できるのも地域の力なのかなとも感じている。ただ、コロナのためどうやって活動していいのかが最初からわからなくて、2期目3期目の方々に今までこうだったよという話をしていただけたら、また、定例会も配りものをして終わりということも多かったので、任期が浅い人たちには不安な材料だったかなと感じています。その中でもなんとかみなさんと繋がったり連絡を取りながら形式を変えてやってきたところもあるので、そういうところをお話できればと思います。今日はこういう企画ですが、みなさまのお知恵を拝借できればと思います。」



☆座談会メンバー☆

宇田 俊明【1期】

担当地区(下柚木区)

広報部会部長

高木「民生委員活動は全国どこでも一緒のことをやってくださいなんですが、先ほど宇田さんが言ったように地域の大小または人数によって、「やってほしいこと」は一緒だが実際に「やれること」が変わってきますし、3期目と1期目でも「やれること」は違ってくる中で、実際に今、甲州市の中ではどんなことが行われているのかを知りたいと考えています。また、もう1つ、民児協の事務局は多くの場合行政が持っているが、甲州市は社会福祉協議会(以下社協)が持っているのが大きな特徴であり、県内27市町村のうち社協が事務局をもっているのは4つぐらいしかありません。社協とタッグを組んでいるという特異性の中で、頼まれごとも多いが、だからこそできることも多いという捉え方もある。今後人口が減っていき、役が重なっていく中で、一緒にやっていくことの良さを見出していかないとどこも疲弊していつてしまうので、この甲州市の取組は県内でもモデルになるものだと考えているし、場合によっては地区間のモデルにもなると思うので、みなさんの活躍を聞くのを楽しみしていました。今日の座談会のテーマは「民生委員と地域」「民生委員と子ども」「民生委員とコロナ」という大きく分けて3つのテーマ、さらにできればこの後に「これからどうしようか」というところまで話ができればと思っています。」

★座談会コーディネーター★

高木 寛之

山梨県立大学准教授

甲州市社会福祉協議会

アドバイザー



※参加メンバーの肩書き等は開催当時のものです

～民生委員と地域～

高木「民生委員と地域ということで地域をどういう風に捉えるかはざっくりした話ではありますが、先ほど園部さんから下の名前で呼び合う地域なんて話が出た一方で、宇田さんの地域は50戸ほどしかないから全部知っているという話も出ました。反対に中村さんのところは民生委員の数が多ければ住民も多く、さすがに全住民を把握するのは無理という地域もあると思います。それぞれ地域との関り方は違うと思うが、その中で民生委員児童委員として地域とどのような関りを持っていたのか、地域というと「エリア」の話になるが、その中の「人」に焦点を当てていただき、地域の中でこんな人たちと関わっていて、こんなことが自分の役割と実感していることや意識していることなどを教えてください。まずは経験の長い方、中村さんからお願いします。塩山地区での関わり方・役割についてどのようなことを意識してきましたか？」

中村「塩山地区というよりはもう少し地域を狭めて私が暮らしている地域の関りとして、私が民生委員になったちょうど9年前に、中止されていた敬老会といきいきサロンを同じ時期に立ち上げることになり、民生委員として両方に関りました。その経過で老人クラブの総会に呼ばれたり、いきいきサロンの運営という面からも地域の高齢者との関りが強くなりました。また、住んでいる下塩後という地域は、自分の周りだけでも集団登校班が3つあり、子どもの多い地域でもあるが、夏休みのラジオ体操にはなるべく多くの会場に行って一緒に体操をしたりして関りを持とうとしています。いずれにしても私たちの役割は地域住民の情報を集めて困っている方のサポートをする。それと独居高齢者の見守りが私たち民生委員の重要な職務ではないかと思っています。」

高木「続いて園部さんいかがでしょうか？園部さんは何もわからない状態でこちらに越してきたということでしたか？」

園部「話は少し遡りますが、合併して勝沼町として1つの単位民児協になったが、合併前は4地区に分かれて活動していたため、今も各地区に会長がいます。そんなこともあるため、極端な話自分の地区以外がどんな活動をしているのかわからない状態です。できるだけ一緒に活動をしようとはしているが、支部社協との関係性もあるためなかなかまとまらずにいます。敬老会についても、勝沼地区内で開催しているところしていないところがあり、私が住んでいる菱山地区の敬老会は116回目を数えるが、コロナのため止まっている。民生委員・区長・公民館が協力してそれぞれで出し物を出したりして1日ばかりでやっている。敬老会一つとっても地区によってやり方がバラバラであり他の地区のことはわからない。民生委員として何をするのか？といわれた時も同じである。ただ、新しいことをどんどんやっていこうということで、私の代の時に普通の民生委員活動以外にも支部社協や区長会を巻き込んだ活動をしているというのが現状です。」

高木「続いて古屋さん。大和地区は比較的名前がわかる地域ということでしたか？」

古屋「塩山・勝沼地域とは全然違って少子高齢化の典型的な地区であり、高齢化率は50%を超えているような感じを受けている。先ほどいきいきサロンの話も出ましたが、大和地区は9地区中2地区でサロンを実施しており、私の地区でもやっていて、私がサロンの代表も兼務している。なにごとにも楽しくを信条に、サロンも自分が楽しみながらやっている感じです。大和の他の地区でもサロン立ち上げの機運が高まった時期もあったが、急峻な山間地ということで地区によっては足の問題がネックになっている。またそれに関連する問題として、買い物や通院も高齢者にとっては大変であり、路線バス以外は交通手段がなく、かと言って民生委員が送迎をするわけにもいかないのです、そのあたりのサポートとして移動販売車が1台大和をまわってくれているが、その方も高齢者のためいつまで続けていただけるのかということもある。民生委員としての共通認識として、高齢者や子どもが楽しく暮らしていけるためのシステムのために、少しでも役に立てれば良いかなと思っている。高木先生が社協研修会の時に「ふくし」=「ふつうのくらしをささえるしくみ」と話をされていたので、そういうふつうの暮らしができる地域のシステムが構築できれば良いかなと思い活動している。」

高木「次は今澤さん。児童のところも入ってきて、それは次の子どものテーマでも触れますが、普段地域の中でどういった人たちの関りやどういった役割を、期待されているもしくは担っているとお考えですか？」

今澤「主任児童委員として地域の中での大きな活動の1つに、子育て中の母親やその子どもが交流したり、またほっと一息つける場所としての子育てサロンがあります。私の住んでいる大藤地区の場合は、主任児童委員は地区で1名なので、民生委員にも手伝っていただきながら開催しています。子育てサロンにお誘いする前には、社協事業のファーストスプーン事業に民生委員と協力して自宅を訪問し届けることもしているが、大藤地区は支部社協から新生児に絵本プレゼント事業をしているのでそれも一緒に届けています。仕事をしていたこともあり自宅回り以外の地域のことを全然知らなかったが、主任児童委員をすることで地域を知る機会や、地域の人との関りを持てたことは良かったことだと思っています。主任児童委員として子育て中の母親と地域をつなぐきっかけづくりをしていければいいのかなと考えています。」

高木「続いて宇田さん、いかがでしょうか？小さな地域ということもあるかと思いますが」

宇田「一期目でしたので、まずは民生委員になってから配布用のカードを持って、コロナ禍ではあったがマスク等の感染対策をしながら独居高齢者宅を訪問した。行ってみると改めて「足が悪くなってきてるな」ということに気づくこともあった。ほとんどがお寺の檀家であり、正月のお札配りとお盆の棚経には必ず自宅を訪問していて、コロナでも否応なく行けるという特権があり、そういう面では大変恵まれているのかなと思います。もしかしたら全国のお坊さんがみんな民

生委員になった方がいいのではないかと思うぐらい、みんな顔見知りであり、各家庭の内情とかもこっそり相談にくる人もいて、子どもの時からそれを見ていて、話してはいけないことも教えられてきたので、「守秘義務(秘匿)」ということも自然と覚えたような状況です。相談に来た方が地域で元気に過ごしている姿を見ると、誰かが知っていてくれるという有難さや心強さというのも民生委員の役割かなと思ったりします。コロナのワクチン接種の電話対応に関しては甲州市も大変苦慮していたと思いますが、檀家の一人のおじいさんが文句を言いに行き、そのことを聞いてくれるか？と行って1時間ぐらいずっと話をしてくれたことがあった。そういう苦情処理係ではないが、一旦出た熱を治めていくという役割も実は民生委員の役割なのかなと思ったりします。ただ、私の場合は民生委員としてなのか住職としてなのかよくわからなかったのですが、でもそういう意味合いでは世界中でパニックになりがちな中、日本はコロナに翻弄されながらもパニックになってないというのは、民生委員も含めた細かくやり取りをする情報伝達のシステムが自然にできているからなのかなという気がします。段々地域とのつながりが薄れてきている世の中ですが、伝達の方法を変えながらもつながっていくことの大事さというのも感じた3年間でした。あとは、新任としては熱中症予防のパンフレットなど訪問するきっかけを与えてもらえるとありがたいです。もし不在でもひと言添えてポストに入れたりできるので、民児協だよりのアンケートにもそのことが書いてあって参考にしたりしながら、本来ならお互いにこんな工夫をしながらやっているという情報交換を定例会の場でできると良いのですが、こんな時なので民児協だよりに情報を含めながら活動しているという状況です。」

高木「今のみなさんの話を聞いていると、「個人」と「集団」に対する取組をされていて、さらにその内容も「楽しみ」と「困りごと」に分けられ、例えば「集団に対する楽しみ」だと先ほどの話からは「いきいきサロン」や「敬老会」なんかが出てくると思います。一方で「集団に対しての困りごと」みたいなどころでは「見守り活動」をやっている、「個人に対する楽しみ」としては「ファーストスプーン」や「絵本プレゼント」、「個人に対する困りごと」としては「個々の相談に乗る」ということがあったかと思います。細かく見ていくとズレてくる場所もあるかと思いますが、みなさんがやっている活動は個人のところから集団に対してまで幅広く活動されていて、その中心には、最後の宇田さんの「何かきっかけがほしい」というひと言は正にその通りだなと思ったのですが、いかに民生委員として「情報」を持っているかがあると思います。サロンに対して情報を渡すだけではなく、サロンからも情報をもらっていたり、ファーストスプーンや絵本プレゼントをしながらもお互いに相談しながら、双方向に矢印が出ていると思います。このような形でみなさんがいろんなことを知りながら、知る内容は福祉に限らず「家族のこと」や「生活のこと」も含まれていますが、地域に発信し、また地域の声を受け止めたりなんてことが先ほどの話の中から出てきました。」

～社協との連携～

高木「本日はせっかく社協もいるので、話の中でも社協との連携が始まっているということが出てきていましたが、社協との連携の中で「社協に期待したいこと」に一步踏み込んで、民生委員活動をしていく時に期待したいことは何か？を教えてくださいたいと思います。今回は古屋さんからお願いします。」

古屋「支部社協との連携ということですが、大和地区は2年前までは支部がほとんど機能していませんでした。支部長が新しくなり、支部としてどのような活動をしたら良いかわからないということで私のところにも相談に見えました。先ほどの話にも出ていましたが菱山では社協と民生委員が連携して高齢者の見守り活動をしていたり、民児協会会長会等でも他地区の取組の様子を聞きながら、一生懸命やっているなと感じていましたので、「大和でもやろう」と支部長に提案しました。支部長からも「ぜひ民生委員も協力してください」と言われ、民生委員の特権として独居高齢者名簿等で地域の高齢者を把握していますので、「連携してやっていこう」という中で、支部社協とのコラボということで昨年より動き始めました。テレビ・新聞などからも冬になると火災に要る死亡事故が多くなるということを見聞きしますので、火災報知器の設置の有無を確認すると無い高齢者宅も多かった。今は義務化もされてきていますので、その設置を支部と共同でできないかなと思いました。昨日の定例会で既に民生委員が未設置の高齢者宅の数を拾い上げてきていますので、今後支部社協と一緒に設置をするという活動が既に始まっています。設置も業者をお願いするのではなく、地元の消防団にお願いできないかということになり、消防団長に話をし「消防団も設置に協力しよう」というところまで話が盛り上がっている状態です。私は支部社協と民生委員は福祉ということで大きな目的は同じなので、別々よりは一緒に歩調を合わせて行くほうが地域にとってはプラスになると感じています。民生委員は活動費が少ないですが、支部社協の方にはある程度の資金もあるということで、地域のために有効に活用できるように一步踏み出しているという状況です。他にも高齢者宅を訪問すると粗大ごみで困っている様子も目に付くので、それも支部社協と一緒に片づけたいなとも思いますし、民生委員は訪問活動からいろいろなことに気付くので、それを支部社協と一緒にやっていければより素敵な地域になるのかなという感じがしています。先ほど宇田さんからもお坊さんが民生委員になれば良いなんて話もありましたが、昔から「駆け込み寺」なんて言葉もありますし、困った時には駆け込み寺のような民生委員になれば良いかなという風に思っています。

高木「今おっしゃっていたように、例えば見守りみたいところで、見る目が増えるということもありますし、見る場所もその分変わるということもあるし、何かをやる手も増えるし手の技術も拡大していくということが一つ社協との連携から見えてくるところかなと思います。今澤さんは児童のところかというと人数が少ない中でお一人でやられている苦勞もあるというお話でしたが、社協や支部社協に期待したいところは何かありますか？また、社協との関係の中でこんな活動をしていてみんなに教えたいということがあればお願いします」

今澤「新生児の絵本プレゼントの他にも、大藤地区は小学校新入学児童にも支部社協から絵本プレゼントをしているが、金銭的なバックアップはしていただいている。大藤小学校は全校でも30数名の児童なので、民生委員や支部社協の方たちにもこういう子どもがいるんだよということを知っていただけるような取り組みがあれば、地域の目が増えていくことにつながっていくのかなと思います。1期目の時は子どもとの声掛けもあったが、2期目になるにつれ子どもの数も減ってきて段々なくなってきている。少ない中でも地域の中で見守ることの必要性は感じます。」

事務局「絵本プレゼントについては大藤地区が最初に取り組み始めて、それが各地域に広がっていったという経過があります」

今澤「そうですね。それが勝沼や大和地域に広がっていった感じです。」

高木「大きな声では言えませんが、支部社協がお金を出すだけになっていませんか？という問題もあるわけですね。できれば顔も出していただけるとありがたいということが期待したいところですよ。子どもたちが少なくなってきているとはいえ、一人で見えていく・一人で関わっていくことの難しさもあるわけで、そうなった時にお金だけじゃなく少し顔を出してくれるだけでも変わってくるよねという話かと思えます。多分民生委員や児童委員がやっているところに支部社協が手を出しても良いのかわからないということもあるかもしれない。そういった意味ではどんどん来てと発信したりですとか、市の方から積極的に機会を設けたりするだけでも、またもう一歩変わってくるかもしれないですね。」

今澤「地域によってやり方が違って、大藤だと小学校の入学式の時に渡す方法をとっているが、勝沼みたいに書類などを準備して細かく丁寧にやられている地域もある」

高木「また大藤バージョンというのを考えていく必要があるかもしれないですね。続いて宇田さんの地区は社協や支部社協との関係はいかがでしょうか？」

宇田「松里地区の支部社協は敬老会が全てであったが、今はコロナ禍で開催できていないので何をしているのかわからないという状態になっている。でも、今までの敬老会はバスで会場まで送迎して大人数を連れ出ししたりして、支部の委員になると「何をしたら良い？」「敬老会をすれば良い」という感じで、そこに全てをかけていて、しかも10月は運動会や文化祭等他の行事とも重なるので役になった人は死に物狂いでやっていて、それで精一杯になってしまうのかなとも感じていた。反対に時期を変えてやっている地区もあるということを知ると、そうしてもらえるとありがたかったのになと思うところもあるが、それで疲弊してしまって動きがとれなくなってしまって、もうなり手がいないから止めるかという話も出てきていて、それさえやっていけばよいという風に役割を勘違

いしているのかなと感じるところもあります。でも、他にも広げてもらえるところもあるのかなと。同じような活動をするわけだが、アプローチの仕方が民生委員と支部社協では違ってきていると思うが、そういうことも話し合いから始めないと本当はできないんだろうなと思います。そういうところを期待したいが、この3年は何もしていない状態なので私もわかりません。」

高木「古屋さんが2年前から支部社協が変わったと話していたが、ここ何年かで社協としても支部社協の動きを変えていこうという取組をスタートさせていて、変えていこうとした瞬間にコロナでできなくなった面もありますが、今まで休眠していた支部社協がどのようにして息を吹き返したのか、なぜだったのかということ事務局から話をさせていただいた後に、残りのお二人、9年やっていれば支部社協が眠っていた時期の長さで起き上がった時とのコントラストもわかると思いますので、話を振りたいと思います。それではまずは事務局よりお願いします。」

事務局「もともと支部社協は決まったこと、敬老会ですとか会費の集金をやればよい、それを次にもそのまま引き継ぐだけという形でした。せつかく各地域に支部社協が組織されているのだからもっと活性化をしよう、また、同じタイミングで自分たちの地域のことを自分たちで考える＝協議体ですとか、地域でお互いに支え合う＝地域共生社会という国の施策も始まったこともあり、その方針と支部社協活動をリンクさせて活動していこうというのがきっかけになります。その中で社協と民生委員は車の両輪であり、お互いが連携することで地域福祉が推進されていくと言われていまして、各地域に支部社協が組織されていること、また、民生委員の事務局を社協が担っているということもあるので、連携に向けた取り組みがスタートしているところであります。ただ、この取り組みを進めてから5年目になりますが、半分はコロナ禍での取り組みであり、なかなか思うようには進んではいません。そういった中でも大和で合同研修会が開催されたり、菱山で一人暮らし高齢者の見守り訪問活動が始まったり、また、他の地区でも徐々に民生委員と支部社協との連携が進み始めてきており、当初から時間はかかるものと思って取組を進めてきていましたが、少しずつ変わりつつあるのが現状です。」

高木「菱山という話もでしたが、園部さん、やはりこの9年という経験の中で支部社協との連携であったり、もっと期待したいことも含めて、社協、支部社協と民生委員活動というところではどんなことがご意見としてありますか？」

園部「菱山地区においても前は民生委員と社会福祉協議会はお互いに背中合わせで、それぞれ別々に活動しているという現状だったが、それでは地域の為の活動になっていないのではないかとということで、一人暮らし高齢者に何かしてあげたいというところから、最初は食事会を企画したが人が集まらなかった。それなら呼び出すのではなく支部社協と民生委員と一緒に訪問して声掛けをしたらどうかという話になった。民生委員だけだと、また来たのかという風にもとられるが、そこに新しい人が入ることでもまた違ってくるのではないかと。社協の財源として共同募金があり、もともと食事会に使う予定だった資金で何か物品を一

緒に持っていったらどうかということで始まった。その当時の社協支部長が家の隣の人だったので話をして、高齢者は買い物弱者でありトイレットペーパーやティッシュペーパーなどの大きい買い物は大変なのではないかということになり、それを持っていったところ非常に喜ばれた。また、絵本プレゼントも同じで、最初は社協でお金出すから民生委員が本も買って配ってくださいということで、民生委員からも反感が出ていた。子どもの人数が多い地区はまとめて学校に配るといいう地区もあるが、菱山地区は人数も少ないので家庭訪問で配ることになり、学校にも協力いただいて事前に民生委員が訪問しますという連絡を入れてもらうことにした。本だけではなく子ども宛て、保護者宛ての手紙をつけ、お絵かき用の色鉛筆をセットにして配布している。絵本もバラバラにすることでお互いに回し読みができるようにしています。あとは熱中症予防のために高齢者に小さい袋に入れた飴玉を配って声掛けをしている。このお金も支部社協からお金を出してもらっている。敬老の日の時にも長寿飴として配っている。そういうことで支部社協とは密接な関係を持ち始めてきているところです。いきいきサロンについても、支部社協から補助金をいただきながら民生委員や公民館、老人クラブの会長なども関わりながら一緒にやっています。」

高木「表面だけ見るとお金持っている人にたかる感じも受けますが、民生委員活動として一人でやっていた限界を超えていけるんですね。きっかけだったり一歩踏み込む時の人であったりお金であったりアイデアであったり、そういう意味では支部社協をととても上手に使いながら一緒に活動しているのが菱山の特徴として見えてきたりしますね」

古屋「ウィンウィンの関係ですね」

園部「お金がないものですから、出すとするとポケットマネーになってしまいますので、やりすぎではいけないし、次の人も困るということになりますので、支部社協を巻き込んでおけば次の話に持っていける。」

高木「これは社協としてもとても良いやり方だと思う。社協の支部の活動費には地域からの会費も含まれていますので、その会費をどのように使っていくかというところでは、しっかりと地域の人たちの手のところに戻ってきていると言えると思います。中村さんも9年目ということで、社協との関係の中ではいろんな変遷を経て活動をされていると思いますが、どんなことを一緒に活動してきて、また、こんなことを期待したい・期待されたいなんてことがあればお願いします」

中村「9年前を思い返しますと、私が所属している塩山南支部の支部長は市社協の会長が兼任をしていました。ですから民生委員は全て支部社協の構成員に名前を連ねていましたし、そんなに変わったという実感はないのですが、ただ、支部社協も変わりつつありますので、そういう意味では今は高齢者や子どもの虐待ですとか、認知症の見守りをするにあたっては起きている現象が家庭という閉鎖的な場所で起きていますので、なかなか民生委員だけでは目が届かない。そ

ういった中で、今、甲州市が取り組んでいる生活支援体制整備事業で第1層第2層第3層の協議体を作ってより地域の住民を見守る目を増やそうということで、第1層は市全体の大きなくくりですが、第2層は社協が主体となって活動を進めていて、その下におそらく行政区単位で第3層を立ち上げて地域の見守り体制を整えていくことが、これからの民生委員と社協との関りの中では大きな役割になってくると感じています。私の地区では地区民児協の会長が支部社協の副支部長を兼ねていて、市民児協の会長は市社協の副会長も兼ねているわけで、時には民生委員なのか社協なのかわからなくともありますが、でも、両方の考え方が取り込めるのでそこは良いかなと思っています。先ほど社協が民児協の事務局を担っているという話が出ましたが、隣の山梨市もそういう関係でして山梨市民児協の会長ともよく話をするのですが、取組が全然違います。山梨市はほとんど事務局としての仕事をしているだけで、民生委員と繋がって何か活動をしているという話は聞いていません。そういう意味では甲州市の民児協と社協は太いパイプで繋がっているという印象を持っています。」

高木「パイプがしっかりあるということはとても大事なことで、地域の活動とか地域の目が増えるというのは、これからのことを考えていった時にすごい重要になってきます。宇田さんや古屋さんとかのところは、まだ地域との距離が近いのかもしれませんが、中村さんや園部さんのところ、また今後人が新しく増えてくるもしくは移動してくるなんてことを考えると、民生委員一人との相性の中で「あの人はちょっと嫌だな」となった時にチャンネルが何もなくなってしまいます。そういう意味でもいろんな接点を持てるというところで、民生委員だけではなく支部社協の人ともどこまで接点があるかでもまた変わってくると思います。特に虐待等は閉じている世界で起こり得るなんてことを考えると、そこへの接点というのが、例えば性別や年齢、職業や家族構成かもしれないですが、様々な、支部社協はもう少しバラエティが増えると良いと思いますが、バリエーションが増えていくと接点も増えていくというところで、一緒に活動できる良さが見えてくるのかなと思います。」



座談会の様子

～民生委員と子ども～

高木「先ほど虐待の話も少し出ましたが、今日は主任児童委員の代表として今澤さんもいますし、テーマの中には子どもということもあります。絵本だったりファーストスプーンというところの活動の話も出てきていますが、昨今子どもを取り巻くトピックというところでは、ヤングケアラーだったり子どもの貧困だったり学習支援だったり、また学校内でのいじめや家庭内での虐待等、子どもを取り巻く課題というものがいろいろと取り上げられてきています。ヤングケアラーなんかはここ数年の話ですが、ある市町村では条例ができたり、山梨県でも実態調査なんかをしたりとか、子どもの数は減っているのに子どもの虐待は増えている等様々なことが起こっていますけれども、民生委員活動と子どもに関するところ、今までは楽しみの個人みたいなのところがありました、困りごとということで、高齢者の話は今まで出てきていますので、子どもと子どもを取り巻く家庭も含めた課題と民生委員というところでみなさんのご意見ですとか活動内容についてお話を伺いたいと思います。これは宇田さんから始まって最後今澤さんをお願いしたいと思います。地域に子どもはいませんという「パス」で終わってしまいが…いかがでしょうか？」

宇田「私の地域は子どもが少ない地域ですので、逆に言えばみんなが見ているということも言えると思います。私は個人的には「あまりに見張られ過ぎてるのもかわいそう」かなと思っていて、子どもが少なくなったのに虐待が増えたというのは「見守りの目」ではなく「見張りの目」が多くなったからなのかなと感じています。真面目な人ほど関りを持っていくとは思いますが、それが反対に仇になっているのかなど。のびのびみんな遊んでいるのだろうかと思ってみたり、コロナがこれだけ追い打ちをかけると行動範囲も狭められてしまうところもあるので、私の地域ではそういうところは見当たらない気もしますが、それでも狭い空間だとそういうこともあるかもしれないのでちょっとわからないですね。先ほど話が出たようにいろんな雑多な人たちが見ていく、「ダメ」と言われたことに対して「いいよ」と言う人もいることが良いのかなど思ったりするので、画一的な価値観を植え付けないためにも、大勢の人が関わるのが、これから育っていく子ども達のためにも良いような気がしています。個人的には民生委員にもう少し若い人にもなってもらいたいという希望もありますが、実際は現役で仕事をしていると難しい面もあるとは思いますが、でも何かで関わるところはあるので、サブメンバー・サポーターみたいなあり方があっても良いのかなど。何かかっこいい名前をつけて仲間になってもらえるといいなと思いますし、これからはこういうことも必要なかなと思うし、更にネットやSNS等で繋がって、ラインなんかで情報共有できるとまた違うのかなど思ってみたりします。この3年の任期中には、ファーストスプーンも渡したこともなく、子どもと関わるということとはあまりなかったので、そういう地域もあるということを知っておいてもらえればと思います。」

高木「今までの話の流れからも、もしかすると民生委員のサポーターが支部社協になってもらえると良いかもしれないですね。地域によってはお互いに民生委員から支部役員へ、また、支部役員から民生委員へなるとかができるとまた面白いかもしれないですね。続いて、園部さんいかがでしょうか？」

園部「子どもの関係は、地区によって違ってくるとは思いますが、菱山地区の場合は、先ほどあげたファーストスプーンや絵本プレゼント以外で、小学校の運動会に民生委員が招待されて参加をしています。」

高木「その参加というのはこういった形での参加ですか？テントの中に座っているだけではなくて一緒に走ったりするんですか？」

園部「玉転がしなんかと一緒にやることもあります。あとは、地域の道祖神祭りとか、どんど焼きという地域行事や文化祭と一緒に見に行ったりする中で子供たちと関わりを持っています。また、菱山には植林というイベントがあったり、中学生になるとブドウ畑の手伝いなんかでも子どもと関わる機会があります。」

高木「今の話だと多くの人たちの楽しみということがスタートラインになりますが、困りごとみたいなところでの関わりというのは、9年の活動の中で出てきたりというのはありますか？」

園部「子どもたちは体験をしながら楽しむと。例えば幼稚園児が芋掘りへ行くのと同じようにジベレリンはこうやるんだよとか、植林はこうなんだよというところを楽しみながらみんなで協力して働くということも必要かなと、従って学校の活動の他にも地域住民との関りも入ってくるわけです。その中でヤングケアラーということであると、昔我々の場合には家での手伝いは当たり前だという風に考えている年代ですが、それが今は家の手伝いをすることがヤングケアラーとして捉えられているのではないかなと、少し心外な感じがしないでもないですが、受け止め方は人それぞれですから仕方ないのかなとも思います。ただ、いじめに関しては子どもたちも少なくなってきたので、集団登下校なんかでお互いに助けあっていると思います。不審者が出た時なんかはみんなで見守りをするという方法をとっているわけです。子どもたちとの関りは民生委員活動の中にも入ってきているのかなという感じはします。」

高木「では、中村さんは子どもを取り巻く困りごと等々での関りということではいかがですか？」

中村「今は学校との連携というところが希薄になってきていまして、地域によっては民生委員が入学式に招待されたり、卒業式に参列するということもあるわけですが、私の所属している地区民児協は人数が多いものですからそういう関りもありませんし、年1回学校訪問をして校長先生とコミュニケーションをとるといような活動しかしていません。学校の先生の中でも「民生委員って、そんなこともやるんですか？」と言われたこともあり、民生委員をあまり理解していない先生もいるわけですが、そういう中で少しずつ学校側とコミュニケーションをとって、例えばコロナがなければ父兄参観日に民生委員として参加させてくださ

いですとか、そういった繋がりができるのではないかなと思ってます。コロナが少し落ち着くタイミングが、また学校と関係を築くチャンスかなと思ってます。」

高木「続いて、古屋さんいかがでしょうか？」

古屋「子どもの話の前に、民生委員というネーミングですが、正式には「民生委員児童委員」という風に児童委員も付いてるのですが、でも世の中的に民生委員という部分だけ先に走ってしまって誇張されていて、児童委員という部分がなかなか着いてこないですよ。だから世間一般的な呼び名を「民生児童委員」という風にした方がいいのかなと。民生委員だけだと高齢者だけを面倒見ているニュアンスになって錯覚を覚えやすい感じもするので、日ごろから疑問に思っているところでもあります。大和地区でも学校訪問がずっと続いていたが、コロナになってから運動会も含めて声がかからなくなった。今度の校長先生の裁量もあるかもしれませんが、町民で行う地区のグランドゴルフ大会に小学児童や学校の先生も入って、町民・児童・先生が一体となってやるような取り組みも始まっているので、良いことだなと感じている。去年はちょうど雨だったが体育館に場所を移して、軽スポーツ大会に切り替えてました。私も参加したがとても楽しい思いをさせてもらった。子どもの関係の困りごとという、個人情報保護の観点があって、大和地区に子どもたちが少ないからということで、教育総務課が行っている困窮世帯を対象とした事業があるわけですが、そんなの無いのかなと思っても結構あるかなと。全体としてみれば、シングルマザーですとか、コロナによって失業された方とか困っている家庭もありますので、そちらの方にも目を向けていかないといけないかなと思っています。」

高木「ここまでを受けて、今澤さん。見えている世界が違うところで主任児童委員として見ていると思いますけど、子どもを取り巻く環境というところでは主任児童委員としてどのような活動をされていたりしますか？」

今澤「今の古屋さんの話にもありましたが、「民生委員」という言葉はみなさん知っていますが、「児童委員」や「主任児童委員」といになると、地域のお母さん方と話をしていてもまだまだ知られていないということを感じています。主任児童委員の役割として。民生委員児童委員の児童委員に関しての部分で、行政や関係機関との間に入り連携や連絡調整をしたり、援助とか協力をするという立場です。なので、ファーストスプーンにしても民生委員が主体で主任児童委員はそのサポートという形になっていて、このスプーンを配ることも、先ほどから話に出てきている虐待の早期発見のきっかけや地域との顔つなぎの役割もあります。子育てサロンも地域の特性を生かして各サロンが工夫しながら開催しているので、コロナで思うような開催はできていませんが、それでも来てくれるお母さん方の顔を見ると、やって良かったと思えたりします。学校の連携でいうと、コロナ以前は学校訪問をして授業を見させてもらったりして直接子どもの様子を見る機会もあったが、コロナになってからは学校訪問もなくなり先生たちとの情報交換もできていないのが現状です。また、児童委員や主任児童委員に対する

学校側からの理解も薄いところも、今後どうしていくのか悩みの一つではあります。大藤地区の話をする子ども数が減ってきているかという全体がわかるかというところでもなくて、一軒一軒の家が離れているので、子どもや家庭を理解・把握するのが難しいと感じています。学校との連携の中から登下校の見守りなんかができればいいとか、学校のメールやラインなんかで情報の共有ができるといいなとも考えています。」

高木「事務局に聞きたいのですが、甲州市は子どもの貧困問題なんかは表に出てきてないですか？このコロナになってから子どもたちへの学習支援ですとか子ども食堂という言葉が流行ってきたり、食料支援としての取組としてフードドライブなんてことも出てきたかと思うのですが、甲州市としてどのような感じですか？」

事務局「子ども食堂をやっているという話は聞かないです。フードドライブも2年前から社協として取組を始めたが、食糧支援としては甲州市は生活困窮者自立支援事業の中で市が単独で行っている食糧支援の方で対応している感じです。」

高木「そうなってくると民生委員の方に個別の困りごととしての子ども、というところはあまり出てこないで、どちらかというと広く子どもとのつながりを作ろうというところの方が出てくるというのが、甲州市のある意味方針になっているわけですね。ここまでの話を聞いていると、スプーンなどから早期発見に繋げるという役割が大きいように感じました。出生率が上がっていて子育て支援が上手くいっている市町村の取組をみていると、18歳以下の医療費無償以外にもオムツやミルクを無償にしているところがある。それを届ける時に話をするので子育てが閉じていかないようにしていく取組をしていて、その同じような取組みの甲州市版として、絵本やファーストスプーンで、もう少しバリエーションが増えると良いですが、出来ているのかなというところが今日の話の中から見えてきた気がします。ただ、課題として学校との連携、ここをどうするかというアイデアを出していくことがこの先求められていると思います。仕組みとしてはたくさんあります。要保護児童対策地域協議会や学校運営協議会みたいな会の中に入っていきことも場合によってはやろうと思えばできるし、そこまで大事にしたい時には社協が福祉教育で学校の中に入っていきときに、地域によっては福祉教育サポーターというものを作っていて、そのサポーターに支部社協の人であったり民生委員になってもらって一緒に子どもたちに教えるというところに入っていきという取組みもありますので、学校との連携を民生委員として増やしていきたい中でそれをどういう風にやっていくのかということも社協に期待しているところなのかなと思って聞いていました。」

～民生委員とコロナ～

高木「次の話題としてコロナというのが何回か出てきましたので、コロナについて伺いたいと思います。コロナ禍はまだ継続中ではありますが、振り返ってみて苦慮したところですか、工夫したこと。そして、民児協だより第14号を読む読者の中には新任の民生委員の方も含まれますので、新任の方たちにこういう風にやると良いよというメッセージ、これは1年目の宇田さんに向けてかもしれませんが、今までの活動がわからなくて新しくやるとなってもちょっとわからないなということもありましたので、どういう風に活動を続けていくかというところの今までの苦労話ですか、伝えたいこと、こういう風にやって私は良かったというところを教えていただきたいと思います。これは今澤さんから反対周りで最後宇田さんに戻ってきたいと思います。それでは、今澤さんいかがでしょうか？コロナ禍での活動で苦労したこと、新しい方たちはこういったところを意識した、また、こういうことをしたら上手くいったことなど何かメッセージがあれば教えてください。」

今澤「コロナの前は子育てサロンを開催しても一組の親子も来なかったということが年に数回ありました。コロナになってからは基本的な感染症対策の他にも地域を限定したり参加人数を公民館の利用定員に合わせて絞った上で実施してきたのですが、参加者への周知・連絡というところでも、参加対象者にファーストスプーンを配布する時にちょっとしたカードにひと言添えて渡したりですか、手紙やメールを送ったりして案内をしました。その結果、開催して参加者が0人ということはなくなった気がします。個別に案内をした方がそれ以前よりも人数的に集まったのかなと思っています。」

宇田「途中ですみません。コロナ前まではサロンの周知は回覧板とかで示すだけで終わっていたのですか？」

今澤「スプーンを配る時に年間の予定表と一緒に渡したりですか、市の広報の情報カレンダーで周知したりしていたが、コロナになってからは地域を限定していた関係もあり、広報への記載を控えたりしていました。」

宇田「コロナになってやり方を変えてみたら、改めて来たという部分もあったんですね。」

高木「とても大事なやり方で、広報は基本【彼ら】という3人称の話であって、例えば個別にチラシを配布する方法もまだ【あなた】の2人称にしかならない。これが手紙とかショートメールになると【わたし】という1人称になるので、一気に距離が近くなる。【彼ら】や【あなた】だと、まあいっかとなるところが、【わたし】になった途端、返事をしなきゃとなる。そういう意味では上手にしているという感じを受けました。」

今澤「一方通行のメールもあるのですが、対象年齢を絞ったりしながらやってきました。」

高木「それでは、続いて古屋さんいかがでしょうか？」

古屋「コロナに関連することですと、高齢者のワクチン接種に関して、大和地区は対象人数も少なく1日での集団接種になったので、電話やウェブでの予約などの煩わしい作業がありませんでした。ただ、足の問題が出てくるのでそこをどうにかしてくださいと行政にもお願いをすると、送迎バスでの対応をしていただきました。そこで、民生委員として各地区の希望者の取りまとめをすることにしました。大和支所長からも通知をしていただいたりしましたし、今度の日曜日にも4回目の集団接種があるのですが、本当にありがたい対応をしていただきました。他にコロナで苦慮した点といいますと、私はいきいきサロンの代表もしているので、その開催の可否については非常に悩みました。コロナで休むことによる孤独感とコロナでも開催することによるフレイル予防ということを天秤にかけまして、感染対策を十分にした上で開催した方が良いという結論になり、私のサロンでは、蔓延防止対策とかが出なければ休みなく開催しています。新聞にも孤立や孤独なんて言葉が出てきますが、軽体操をすればフレイル予防にもなりますし、孤独解消にはサロンは有効な手段だと感じています。感染者が出れば責められることもありますが、「孤独の健康被害は肥満の2倍である」という言葉を聞いたこともありますし、積極的に開催した方が良いと思ってやるようにしています。」

高木「中村さんいかがですか？コロナ禍での活動を振り返ると」

中村「3年前に任命を受けてから、まともに活動できたのは1月の定例会と全体研修ぐらいで、コロナ禍になってから私たちの民生委員活動も、完全に新しい生活様式に対応した活動しかできなくなる中で、最初の1年目はコロナがどんなものかもわからなかったのでほとんどが中止となりました。徐々にコロナがわかりはじめてくる中で、人を集めて開催していた事業も個人のところに向いて情報交換しようという風に、新しい生活様式の中での民生委員活動に変化をしていき、場合によっては今後の活動の基本形になるかなという印象を受けています。任期1年目の3月の定例会ぐらいから様子見みたいな形となり、新任の方からも民生委員になったのに何もできない、何をして良いかわからないという問いかけもありました。地区民児協の会長として、そういう方々のモチベーションを落とさずに活動をしていただけるかということに悩みました。定例会時に小グループを作って情報交換をするやり方を1つ加えたりして、新任の方に対しても情報を出そうという風に心掛けました。コロナの感染が拡大や収束をする中で、継続性はなくなりましたが、古屋会長もおっしゃってましたが、迷ったら前へ進めるのも1つの考え方かと思います。現に昨年度の老人クラブは全ての事業を実施したという事例もあるようですので、コロナ禍と「共生」しなが

らやっていくことが重要なのかなと思っています。」

高木「なかなかコロナ禍では難しい中で3年間やってきて、同じように任期9年目となる園部さんいかがでしょうか？」

園部「コロナが発生してからは各行事が止まってしまったことによって、民生委員はどうやって動けば良いのか？という話になった。高齢者宅への訪問も行った方が良いのか、行かない方が良いのか判断に迷うところも出てきたりしたが、行かないと様子がわからないので訪問しても、高齢者だと耳が遠いため、今までは大声や耳元でできていた会話がマスク越しになったためよくわからないという状態になった。筆談や携帯電話等でも会話をしてみたがなかなかうまくいかず、そこらへんが苦勞した点になります。サロンとかも開催の判断が難しく、結局資料だけ配って終わりという引っ込み思案になってしまいました。後任の方へ引継ぐとなった時に、このままの状態で行くのかどうかは非常に難しいところではありますが、とにかく民生委員同士が理解し合わないと上手くいかないのではないかと思います。民生委員同士でよく話し合いをして、活動内容を十分理解した上で活動しないとバラバラになってしまう恐れがある。菱山地区では忘年会や新年会を通して腹を割って話しをしながら意思の疎通を図っています。例年、勝沼では地区の全民生委員が集まって意見交換会を行ってお互いを知る機会を設けているが、それもコロナ禍で開催できなかった。視察研修等も全く実施できなかったのも、そういう面では民生委員活動が上手く機能しなかったのではないかと反省をしているところでもあります。」

高木「かなりの活動の制限があったというのは大きいのかもかもしれませんね。宇田さんにいく前に、事務局から上手くいった活動例や課題などがあれば、情報提供していただきたいのですが、いかがでしょうか？訪問の仕方にしても手紙や電話などで工夫しているという話も出ましたが」

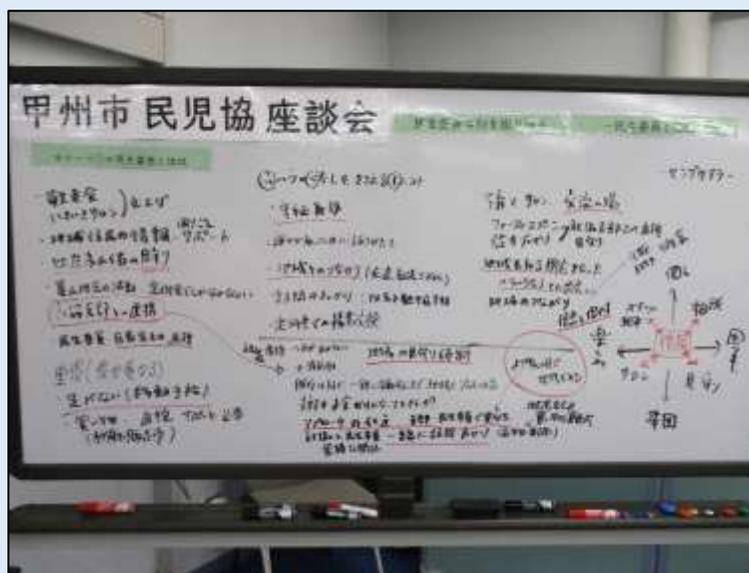
事務局「電話訪問に関しては、市の担当課でも推奨していて定例会等で情報提供をしていただくこともありましたが、高齢者にとってはオレオレ詐欺の電話とも関連してきて、電話に出してくれないという意見もありました。反対に、電話だとゆっくり話ができたと意見もあったので、良い面悪い面両方あると感じています。民児協だより第12号でも訪問カードを活用した事例を紹介しましたが、そういったことも工夫した活動の例かなと思います。」

高木「ここまでを受けて、宇田さんいかがでしょうか？」

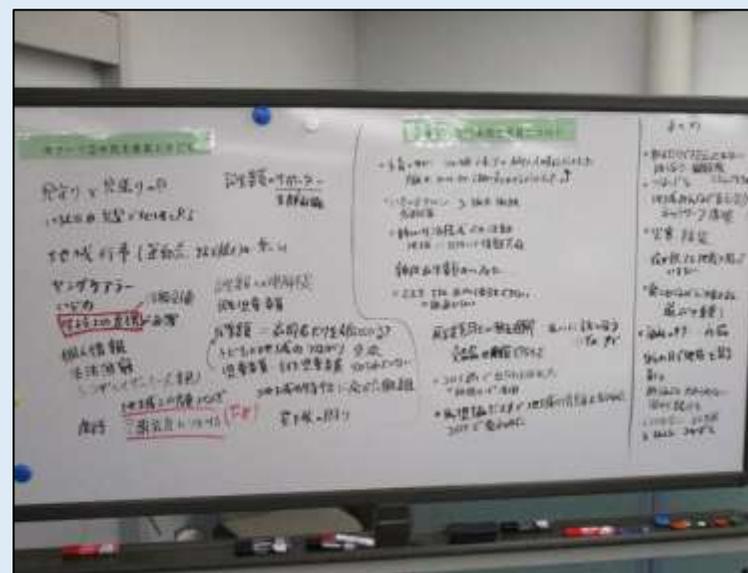
宇田「本当にみなさん工夫をしてやってこられたことがわかりました。昔はどうだったと思っても、今は今なので、それを踏まえて出来ることをやるというのが大事なかなと思いました。私が苦勞した点としては、最初は1年目で何もわからず、出向けなかったという部分もありましたので、定例会等での少ない情報や先輩か

らのアドバイスなどをお互いに交換しながら、先ほどの訪問カードも使って、ひと言と電話番号を記入したものをポストに入れたりして活動をしていました。私としては広報部会に携わることで、広い地域の情報が耳にできたということもありがたかったです。そのいろんな地区の情報をなんとかみんなに伝えようというのが、この広報部会の活動だった気がします。そういう点ではこの民児協だよりの中に参考資料がたくさんあったということで、他の地区はこんなことやっているんだというのを知ることができたのではないかなと思います。私も民児協だよりに助けられた点がありましたので、今後もそういう形の発信でありたいなという風に思います…自分で褒めてみたいですが、でもこのコロナというのは一つの災禍・災害という気もしますので、なのでテーマも災害のところに繋げていけましたし、反対にコロナじゃなかったらみんな考えなかった気もしますので、コロナが教えてくれたという風に思った方が良く今思い始めていますし、コロナだから変わったこととポジティブに考えても良い気がします。それを個人個人でフィードバックしていただければと思います。」

高木「コロナ禍の民生委員の活動ってお互いにアイデアを出しながら、いただいたものを実践して試行錯誤しながらやってきた3年間という風に思いました。民児協だより、私も読ませていただきましたが、ここに掲載されているアイデアをそのままやってみても上手くいかないというのものもあるし、ここに至るまでのカスタマイズの過程がとても重要なのかなと思いました。先ほど園部さんがおっしゃってましたが、地区で話し合うということ、民児協だより12号でも地区定例会の必要性を再認識という風に書かれていましたけれども、やはりこのコロナ禍で新任の方たちにも伝えたいことと考えると、どういう風にやっていくかということと話し合う機会というものを、大きくなくても良いので小さいグループでやれると良いのかなと思いました。富士吉田市の民児協とかが5~6人ぐらいの単位で集まって情報交換をしています。それぞれが一人で孤軍奮闘するのではなくて、細かい地区単位で話し合う、今日の話からは、民生委員だけではなく、支部社協の人たちも含めて話し合うという方が、みなさんの目と手と足が増えるという意味では良いのかなと思います。」



座談会で出た意見



～これからの民生委員活動に期待すること～

高木「そろそろ時間も迫ってまいりましたので、最後にみなさんからひと言ずつ伝えたいことを話していただければと思います。今後の展望、住み慣れた地域で暮らしていくためにというのが一つ大きな社会のキーワードになっていますので、みなさん方がこれから先、民児協だよりの最新号が出る頃は、交代しているもしくは継続しているという状況かと思えます。それぞれの12月以降の生き方というところ、もう一期継続するかたは自分宛ても含めたメッセージを、ここで辞めてしまうという方は、一緒に活動を続けてきた方、また辞めていく方へのメッセージというところで、一言ずついただきたいと思えます。名簿の下からいきたいと思えます。まず宇田さんの今後の予定はどうなりますか？」

宇田「一期目はなるべく継続するよにというお達しがありましたので続けます。コロナ禍の時に民生委員になったというのも何かの縁かもしれないので、それも踏まえてこれから繋げていければいいのかなと思えます。やはり先ほども言いましたが自分だけで抱え込まないで、いろんな方と情報の交換をし合える機会や場を作りながら進んでいければと思います。私は昔、福祉施設に勤めていて障害を持った方の支援をしていました。今またその施設の評議員もしているのですが、施設を解体して地域に障害者を戻す取り組みを進めています。私が勤めていた頃は50人が一斉にお風呂に入り、一斉に同じ食事を食べるという現場を見てきました。この人たちはどこから来たかという、地域から厄介者扱いされてこちらに来たのかなと思えて、市役所の福祉課の担当職員がその人を置いていくときに安心した顔をして帰っていくのを見ますと、それって本当に福祉なのか？とずっと疑問に感じていました。そして、寺の住職となり、民生委員となる機会がやって来た時に、そういう思いも還元できるのかなと思えました。子ども・高齢者以外にも、いろんな方々にありのまま生活していいんだよと言える社会というのを、地域に根差した民生委員だから目指せるのかもしれないので、大上段に構えた人だと誰も寄り付かないので、ぜひ地域に暮らしているみんなでそういうことを支えていければと思います。また、こういうネットワークが折角あるので利用しない手はないなと思えますので、自分もわずかながらそこに携われたらいいなと思っています。」

高木「今回のテーマでは取り上げる時間が持てなかった「障害」という分野ですが、今障害者福祉では地域移行というキーワードで施設の中で、というところから地域に根差して、というような大きな動きがありますので、気を付けないと障害者は忘れ去られてしまう存在になりがちですが、民生委員活動の中にも入っていますし、障害者自身も支えられるだけでなく自分たちで活躍しているという現状もありますので、そういうところも含めてまた皆さん自身で考えていただきたいと思えます。今澤さんは2期6年やっていますが、この11月でおしまいですか？それとも続けますか？」

今澤「まだはっきりしていませんが、主任児童員をやっていて災害や防災に関しては直接関わる機会はないのですが、これから携わる人には赤ちゃんがいる家庭

や妊婦さん、障害児者やひとり親家庭も含めて、地域の中で確認とか情報交換みたいなことをしていってもらえればと思います。主任児童委員になってみると、仕事をしている時は地域を見ていなかったことがよくわかりました。6月に少しコロナが落ち着いていたのでサロンを開催した時に、3組の親子が参加をしてくれて、その時のお母さん同士の話をしている笑顔とか赤ちゃんが赤ちゃんを見る眼差しとかを見た時に、やっていて良かったと嬉しく感じました。お母さんたちがその場所に集まって、お母さん以外の誰かも一緒に子どもを見て笑ってくれる、話を聞いて頷いてくれる、そういう状況があれば、お母さんたちもほっとしたりするのかなと思いました。難しいことではなく誰でもできることなので、主任児童委員になっていただいて、多くの人に地域を見てもらえたらと思います。もし、自分が主任児童委員という立場が終わっても、地域の中での活動に積極的に参加していきたいと思っています。コロナ禍になってから地域の行事もなくなってしまって、触れ合う機会もなかったので、地域行事の大切さを改めて感じましたし、そこに自分から出ていくことが必要なのかなと思いましたので、どういう立場であれそうしていきたいと思っています。」

高木「最初に少し触れても良かった災害・防災の話が出てきましたが、おそらくこのテーマだけで時間が終わってしまうので、今回は触れるのは止めましたが、今日の山梨は良い天気ですけど、他の地域では今も苦しい思いをしている方もいるということを考えて時に、防災や災害危機対策をどのように地域で考えていくのか。民生委員になると(要支援者)台帳を作らなければならないと思いますが、なかなか進まないんですね。県としてもいい加減やらなければというところで進めていますので、おそらく時期民生委員の代で台帳の更新をしていくという作業が一つ大きな山になるかもしれないという気がしています。その時には高齢者に特化するのではなく、ひとり親家庭や乳幼児を抱えている家庭、乳幼児は数年すると大きくなってしまいもう大丈夫ということで忘れられてしまうこともあるので、なのでそこもぜひ気にかけていきたいというのは今澤さんからのメッセージとして伝えていただきたいと思います。あとこれからも地域に関わってきたいという言葉もいただきましたので、社協では地域とどう関わっていったら良いだろうかというファーストステップのボランティア養成講座なんかもやっていたりしていますので、民生委員を引退する方たちが受講生として関わっても良いのかなというアイデアもあります。民生委員を辞めた後にどう地域に関わって良いのかわからない、気を付けないとでしゃばりと言われてしまうかもしれない。そういった中での地域との接点をどのようにやっていこうかというところでは、今澤さんの今後がどうなるかにも関わってくる話かと思っています。それでは続きまして古屋さんいかがでしょうか？ 今後はどうなさる予定ですか？」

古屋「私の地域では2期というのが通例になってますし、新任は原則として70歳以下という決まりもありますので、同じ人が長くやることは他にやっても良いかなと思っている人の芽を摘む可能性もありますし、より多くの地域の方に民生委員という仕事を体験していただきたいという気持ちもありますので、区長には辞退の旨を伝えたところ後任が見つかったという話もきいていますので、辞めるかもしれません。まず今日の座談会というものが初めての開催かと思うのですが、これを企画した広報部のみなさんに感謝したいと思います。みんなと話し合いをする、コミュニケーションをとるということが第一歩かなと、ここで出た

話とかを100%できなくても良いから少しずつ無理をしない程度にやっていくことが地域の発展に繋がっていく気がします。このコロナ禍でも先ほどから隣のデイサービスからカラオケの音が聞こえています、こういう状況からも少しずつでも前に進んでいるのかなという感じを受けます。カラオケをやっている人も楽しんでやっていると思うのですが、やはり楽しみながらやるということが長く続ける秘訣かなと思います。無理してもうこんなこと二度とやりたくないよということであれば寂しいかなと。民生委員活動や支部活動をみると社会福祉協議会の役割は改めて凄いなと感じています。社協事業一覧を見ると51もの事業をやっている、何人でこなしているかはわかりませんが、神業に近いものがあると感じています。昨日の定例会から研修会の最後まで社協の職員には参加をさせていただいて、やはり地域福祉のリーダーを担っていくのは市役所ではなく社協かなという感じがしています。社協の事務局長にも少し事業が多くないですか？と言いましたところ、それだけ信用されているという答えが返ってきましたが、今は働き方改革なんて言葉もありますし、ある程度遊びを取り入れて余裕を持ってやっていくことが長続きするのかなと多いです。私も運送業を50年近くやっていて、3年ほど前に引退した訳ですが、ハンドルには遊びがついていて、この遊びがあるから上手く操作ができるわけで、また、大型トラックは高速道路では時速80キロ以上出してはいけないことになっているが、90キロ出るといふことは、車の性能にも遊びを持たせている。やはりキチキチでは上手くいかないかなと思いますし、社協から届く通知一つとっても気を使っていることが読み取れますので、社協のみなさんにはご苦勞をおかけしていますし、体を大切にしてほしいと思います。」

高木「満足度と給料が比例しないのが社協の弱みですよね。社協が事務局を持っている良さが出てきているのかなと思いますし、今後へのメッセージとしても、一つは話し合うことの良さ、座談会の良さということをお話をさせていただきましたが、広報部会に対する3年に1回は座談会を開催してほしいというメッセージかと思ひますし、こういった話し合う機会というのは、各地区や全体として小さくやってみても良いと思います。最後なんとなくありがとうございましたと終わるのではなく、3年間やってみてどうだった？という風に最後に振り返る機会があるだけでも全然違って来るよというメッセージかと思ひます。もう一つ大事ななと思ったのは、民生委員になって最初の研修で何をやるかという、この仕事をしてくださいなどのスキルセットを伝授されるわけですが、そういったセットからスタートするのではなく、楽しみながらやってみようよというマインドセットからスタートするとまた違って来るのではという気がします。今日のみなさんの話からは区長からお願いされてという方が多かったです、初めの内は気持ちとして整ってなかったです。大きなものを担わされたという感覚になりがちなので、いきなりこれやってくださいではなくて、まずは楽しみながらでも良いんだよ、民生委員としての楽しみ方みたいなどころからスタートした方が新しい民生委員にとっては良いと思います。園部さんいかがでしょう？次はどうするんですか？」

園部「私は年齢的に75歳を過ぎていて、高齢者が65歳以上と定義されていますので、75歳が65歳の面倒を見るのは逆転になってしまうと感じていますので、1月で引退します。ぜひ次の人に申し送りをしていきたいこととして、命を受けたからには自分の天職だと思ってやってほしい。区長さんに言われて民生委員のこともよくわからず受けている人が大勢いて、なってみて初めて「区長さんよりも大変だ」という人もいますが、最後まで責任を持ってやってほしいと思ひ

ます。次に人から聞いた話だけで判断するのではなく、自分の目で見て、捉えて、相手の対応をしてほしい。最後に、断られたからと言ってあきらめずに何度でも訪問して、話を聞いてほしいと思います。」

高木「今出た3つのメッセージ「責任を持つこと」「自分の目で見て確認すること」、私最後の3つ目が好きですが「断られてもあきらめないこと」特に3つ目に関してはとても大事なことかと思えます。断る人たちにとっては誰も周りに居なくなってしまうんですね。断られてもあきらめずに関わり続けるということをお次の人たちにも伝えていただきたいと思いますし、これを事務局には支えてほしいと思います。やっぱり断られることは気持ちも疲れてしまうので、実際に見にいった時の事の大きさ、私も民生委員の人たちと話をしていた時に、ゴミ屋敷の問題ですとか、孤立死・孤独死みたいなどころで遺体に遭遇する場面もあるわけで、そういう時になかなか一人では受け止めることが難しい。それを伝えることができない苦しみの中にいた方もいましたので、ぜひそういったところのサポートも社協にはお願いしたいところではあります。かなり時間も超過していますが、中村さん、最後お願いします。」

中村「市全体や地区の会長という立場から、改選にあたってはご自身の健康と気力、ご家族の応援がある方はぜひ再任してくださいというお願いをしました。今のところ私はそれらをクリアしていますので、もう一期やる予定でいます。ただ、先ほど古屋さんも話をされていましたが、なるべく多くの方がこういう役職を経験することが、同じ考えを持つ方が増えるという意味もありますので、そこのジレンマもありまして少し悩みましたが、最初の自己紹介の中でも話しましたが、自分から手を上げて民生委員になりましたし、体力・気力もまだありますので、もう一期やるつもりでいます。今日話題にならなかった防災の件ですが、お手元に資料を配布させていただきましたが、防災というよりは災害時にどういった対応をするかということで、昨年私の地区では福祉避難所への避難訓練を行いました。避難所に避難して生活をしていく中で、身体的にも精神的にもいろいろな問題を抱えている方が、その避難所で生活できなかった場合に福祉避難所へ繋げる役割を実際に体験したわけですが、万が一災害が発生した時に、民生委員の役割として、避難所での心のケアやサポートが大きなものになるのではないかと思います。ということで本日資料を配布させていただきました。9年前に民生委員になり、制度成立100周年も経験し、またこのコロナ禍の中で新たな民生委員活動を今後どうしていくかという節目にも幸か不幸か体験しました。そういう中でもう一期続けるわけですが、地区民児協の構成を考えた時に、一期の方が30%、二期の方が30%、三期の方が30%という構成メンバーがベストではないかと思っていますので、区長さんからは大体二期とお願いされることが多いと聞きますが、できれば三期ということも、今後地域で活動をしていく中で、進めていってほしいと思います。良いことも悪いことも、楽しいことも辛いこともやっていく中でいろいろありますけれども、辞められる方が大変だと思って辞めてしまうと、次の人も積極的に受けてくれないと思います。民生委員になってこんな出会いがあった、こんなことも経験できたということをお次の方へ伝えていただけるような民生委員になっていけるように、微力ながら尽力したいと思います。」

高木「次の3年の人たち、もしくは今回の任期で辞めていく人たちからも、中村さんの最後の言葉と同じような声が出てくるといいなという風に思います。今回の中で大きかったことは民生委員のサポーターという考え方ですね。それが支部社協になれば一番いいのかなと思います。民生委員が孤立しているというのが、みなさんが活動していく中で出てきている課題なのかなと思いました。例えば個人情報の問題として台帳のことがあって、これを見せるわけにはいかない、言うわけにはいかないというところで、一人で抱え込みがちになってしまう。それを民生委員同士で共有できるかというとなかなかそこまでできなかったということもありましたので、民生委員同士での共有の時間であったりとか、台帳を使わなくても地域の人たちとできることってなんだろうかとというところで、比較的活動の親和性が強い支部社協を活用できると良いのかなという風に思います。ぜひその橋渡し役として、社協にその役を担っていただければと思います。大和は民生委員と支部社協で話し合いの場を持ったと言っていました。」

古屋「区長会長にも来ていただいて一緒に、いろいろな面で小さな地域ですから、各種団体が集まって今後地域をどのような形にしていくかというのを話す機会も多いですから、今地区の公民館も子どもから高齢者までいろいろな行事を実地していますので、上手く連携が取ればいいかなと。先日まち歩きという高齢者から子どもまで参加できる公民館主催の行事がありましたが、自分たちの地域の再発見+コミュニケーションを取れるということもありますので、公民館活動も併せてセットにさせていただけるとありがたいかなと思います。」

高木「先ほど話した「楽しみ」のところで、公民館なんかは大人から子どもまで楽しみの活動をしていく場所でもありますので、そういうところも巻き込みながらやっていただきたいと思いますし、つながりを作ってくれるところ「つなぎ役」としての社協にも期待をしたいと思います。あとは、この長い話を誰がまとめてくれるのでしょうか？今日の内容を広報誌4ページ分にかっこよく掲載していただければと思います。広報部員のみなさまもありがとうございました。参加者の皆様も長時間ありがとうございました。」

事務局「みなさんありがとうございました。事務局としてもたくさんのお土産をいただいたと思っています。地域づくりのヒントが今日の内容にはたくさん詰まっていますし、労いのお言葉もいただいたりして、今まで活動してきた良かったなと感じました。初めての座談会でしたが、貴重なご意見がたくさん聞けて、始まる前は不安もありましたが、終わった今は安心してホッとしています。本日は大変お疲れ様でした。」

おわり